仁義理古武志

四十八鷹圖讃全

登錄第2582號
第 VIII 門
第 3 部
記號 D
函架
平野圖書箋

UNIVERSITY OF KANSAS LIBRARIES
D 1409
RARE BOOKS

仁義禮智信五常之道

一 和漢古今武士
同 緑
二 鷹其姿勢
三 鷹形
四 鷹乃尾
五 鷹生毛
六 同雌雄小屋
八 同敵やう
十 同給
十二 同地取

十三 同雉と稱す
十五 俗に國鳥の異名
十七 鷄家來のこと
十九 鷄の外異名
廿一 鷹と捕時節并
廿三 上古の名鷄
廿五 鷹名 故事
廿六 同病のもの付り 療治
十六 鷹近づく
十八 鷄にて付くる外字義
二十 鷄狗の吠名
廿二 網にうつる鳥の異名
廿四 奥州鷹の産の名

同緑翠

教化盛ん
中の憚
来年なく
七月鳩化
秋は猛
善吏と
こ名付
のごとく
之逐鳥
猛烈并

拙拳 宝十八鷹之圖贊

天地乃
のごとき
大人ニ
王化
古史蒐
鳥乃
良禽小
加護少
仁者如
文人
古今
唐まで
五帝

乃時(とき)に勇武(ゆうぶ)の聞(きこ)え漢(かん)
我朝(わがてう)其(その)神功皇后(じんぐうくわうごう)
二(に)百(ひやく)餘(よ)年(ねん)にして
後人(こうじん)日本(にほん)紀(き)を
見(み)て名(な)高(たか)の豪氣(ごうき)
知(し)り
ぬべし
十七代仁徳天皇(にんとくてんわう)
即位(そくゐ)三十二年甲
寅(いん)の冬(ふゆ)
天皇(てんわう)御猟(ぎよりやう)
に出(いで)給(たま)ふ
ひそまる
雌雄(しゆう)の鹿(しか)
を得(え)給(たま)ふ
雌(めす)鹿(しか)は
生(いき)ながら捕(とら)へ
雄(おす)鹿(しか)は
殺(ころ)して
あそばされ
給(たま)ふ
還幸(くわんかう)
遊(あそ)ばす
御(ぎよ)
沖(おき)
一般(いつぱん)
多里乃(たりの)
雲霄(うんせう)

勇備武備の為おもに其
翁の話戯れ
乃性質おとなしく
色ごとまぶ小姓
ごんでこれと
色好うつ
校刊孔子
乃害とおそ
山野の物
乃求とおもひ
八陣乃
武家小用

痴なる是をもて老の楽とはいひながら
昔く寄合ふ友もなし
其頃の様子を書しるしたる一切の故事用意を書なぐりて
枢要とも扶桑小攬とも名付ぬれば
屏風の縁とも成ぬべきものを
志ある和漢遊覧の人の度ごとに
ぐ受給ふ事ぞかし

琴棋書画論

神書多き和漢一般なれば
小和朝廷の

雀十八種かぞふるに暇
實形
なし
鶺鴒鶫鶸鶲鶺鴒幼鷸まで
待鳳ふくらう
五穀を食せざるはなし
鶺鴒の教種ふり
渡小鳥
又肉食
とびかける
猶十八種とまり
多鳥
鶺鴒
よかるべし
尾合處
色とく
雉子
利ごく

搏ち色数ふる事は寸法
一面一寸ありまたは二寸
三枚面紀ある方なり

宝永
己巳歳九月吉辰

書林 大坂高麗橋壱丁目角
金屋弥兵衛

大鷲之類

それ鳥よい唐土鷲高麗鷲南蛮鷲流球鷲毛人鷲東国鷲西也鷲中夷鷲四也鷲小国鷲乃至鷲ふくろ鷲といひこの鷲すべていひ二鷲の鷲なり北海の



青といひ征鳥といひ
み晨風といひて代々
よそれも名かもわれ遅
をものそはそれ名
鈎みくい敷名敷種
のたうはもつてこ
四十一種よそ
もう今和漢
たうも名をもとく
くにもかをもの

鷹

(二)鷹乃諸名
大鷹　小鷹
甬鷹　鷂
隼　鷻鷹
鴆雄鷹　鷫鸘
黒鷂　通鶻　鶻
山鷂　未巢
兄鵰　鷷鷹
鵰　鷹
鶻　第鷹
鷻　鷻



赤鮫　青鮫　下鮫　底鮫　海猫　鯆　鯨　鯱　鯛　鰯　鰹　鰤　鰆　鰒　鰈　鰕　鰌　鰻　鰐　鰭　鰓　鰥　鰔　鰉　鰍　鰌

羽尾鶴　羽根尾鶴　捨田鶴　身安鶴　耳羅鶴　意涼鶴　小屋像尾鶴　文字屋像尾鶴　尾長鶴　逆毛尾鶴　像尾鶴　子屋像尾鶴　大三浦尾鶴　八尾鶴　羽根尾鶴　安積鶴　一本杉鶴　羽根尾鶴　捨田鶴　妻板鶴　汚尾鶴　尾長鶴　捨田鶴　妻板鶴

大鳥



羽尾鶴　羽根尾鶴　捨田鶴　身安鶴　耳羅鶴　意涼鶴　小屋像尾鶴　文字屋像尾鶴　尾長鶴　逆毛尾鶴　像尾鶴　子屋像尾鶴　大三浦尾鶴　八尾鶴　羽根尾鶴　安積鶴　一本杉鶴　羽根尾鶴　捨田鶴　妻板鶴　汚尾鶴　尾長鶴　捨田鶴　妻板鶴

大鳥

雞 羅雞 鵝雞
老雞 鵝雞
雞・鵝雞 三年雞
菊着雞 鬼居雞
竹孰雞 行纏雞
矛の雞 良雞
佐保姫雞
七面雞
女雞
生土雞
毛雞 生土雞
毛雞 生土雞
毛雞

吳鷲　鵂鶹　梟

鴞鷲　鵄鷲　鵂鶹

二鷲　鵄鷲　鵂鶹

鵰鷲　鵄鷲　鵂鶹

鵰鷲　鵄鷲　鵂鶹

鵰

白生　黄芝生　小芝生　混芝生
楊生　松生　生姜　紅葉生　芝里　鶉生
北白生　時白　小白　蔔白　長白生
後白　尾白　板白　宮白　肌白　眉白
帝白　犬眉白　亜白　雪柳白　小眉白　白
白　疫病白　高紀　白　白　白　白
朝顏白　所白　ごとく今と
ごとく生のかりたよ
名ゐ白ゐ

鸚鷹



くらえ三ぼんの
矢ぢくさ

四 尾猟(おかり)

おれは鷲の
おかしら
ひとり
ら一羽を
尾そ七羽
太とをく
鷲鷲(わし)
のそ(さ)よ
尾そ(さ)
十四羽(わ)
名尾(な)
りこ(さ)
の矢一つ
わ(は)
過(あ)

小鷲(こわし)



羅(ら)といへる一(ひと)つの物(もの)を出(いだ)し、二枚(まい)の中(なか)より一(ひと)つを撰(えら)ばしむるに、其(その)人(ひと)の心(こころ)に思(おも)ふ方(かた)を撰(えら)ばず、必(かならず)ず他(た)の一枚(まい)を撰(えら)ぶ。是(これ)を以(もつ)て考(かんが)ふるに、其(その)人(ひと)の心(こころ)に思(おも)ふ方(かた)は、必(かならず)ず悪(あく)しきものなり。他(た)の一枚(まい)を撰(えら)ぶは、必(かならず)ず善(よ)きものなり。故(ゆえ)に其(その)人(ひと)の心(こころ)に思(おも)ふ方(かた)を撰(えら)ばずして、他(た)の一枚(まい)を撰(えら)ぶなり。

晃鷹(てうたう)



おとい
よりて不問
ごとく
こうら
取て
とりて武
よ他
ひのもと
て夜叉
級
尾く
ちよ時
ちよ尾
てこ
ひろ
乃ひ

小白鷹



大鵬

鷹飼



くゐと水よひうして
雪乃巣のうへをあ
らそふ・・・
おほう水をそろ
わしとの・・・
よとろうろ
いてもも・・・
いくも雲
うま雪・・・
ゐどそして
ゐのもの
新雪ふ
ものう・・・
うしく白
雉雁鴨鶴
を部べ
と作るよ
ら比免下

白生鷹



わくは肉ひろく皮薄く
ふかく潔の不肥れ
をさうれよひくく
かんやうと衛ようけ
飼べしこのくかる
食を飼べくびし
寒ろ生せ山の野
餌をとるべく
ろ食体そこ
ものもと
家よくろ
飼べくく冬月
瘦ろそ肥よ
瘦と死こほり
くやそまき
瘦よんべ
肥と死よそ
労しそやく

鴈



にうそくれいいんそ
たゞ多くは肥えず痩せず
それとうりやうの
ごとき痩せ
とそ定まらざる
肥痩ほどそくして救ふ
時候
それ痩せもの
食とゝこゝろ
あますしと也
そこで肥ず
坐そ時候
の肥を
食とゝろ
なう扨そ
そのわけ
たゞ多くは食
そくれいいんそ加減

鳴雄鷹

鷲上高樓



雕(わし)よ居やうを
それ鷲(たか)の雕(わし)乃
ずに一ときも
法をうまく
ず時をそこ
くいふめやの
いゆるとうえ
とこをおそ
くそれまで
如(ごと)たれ
ゆうべなし
ぬしもだこ
ちうくこ
鷲(たか)を安坐
法(ほう)をおしえ
そだてうひく
雕(わし)とおげて

蜂雕(くまたか)



さしおの鷲のつくこと
びのごとくにて
たゝまんで脾
さけうろこ
ふいてそこと
すわものゝ
まく脾より
そのよう脾は
しかく巣
そこにて
て用
なり就
そしてう
よくまして
ゝしくゝ脾
よそのこと
乃至執

鵰鷲



のゆへよみ
布の尾
えてゝ
とゝえて
さしろ
もの

七

新著
ちゝ
らゝて
なるゆへ
もりは
まゐて
らおゝ
まもの
ゝ白
豚よ
すべて

前像尾雁



餌をとるごとし
あるときはたちそのよくばりてえ餌をとるかとすればさきのわしの野よりきたりてとりぬればまたのぼりてまつごとくなりてしばしばかくのごとくなるをみてかりうどかたりけるやうよきまとをもとめてかけおきてまつときはたちまちにきたりてとりぬれば

幻鶏鷹



山鴨雁鷲



逆生尾の鷹



いろどりたびくさを
ねだいて魚やどもを
みんなこしらえて
てくるさ ねだ脚けた
まして魚すんこ
海の二月に
お場氣こうん
たくうおろこまな
うくなら
秋の午をへ
ゆうべなくこ
時節こ
たぐは

真様尾の鷹







くれもとれて
鳶とをそろ
ひろそれ
さたる
ろをろ
(十一)架ろ
架いけろ
ろふむ
ろず人物
ろろ
ハ鳶ろ
陽ろ
ろあろけ
ろもら
もぐろ
格柱架托
格外格
野格寒者

万歳鷹



鯉切鷹





足大鷹



鷲のやまひ
それ鷲は性こう
てそれよ猟をと
ば白猟してう
ろうろいう鵰
わろひ羅とう
蛮夜飛食とう
愛胃ろ流人は
らまて外皆ろ
してそそもやま
ろ命ろおのぢ
そろ飲啄いと
ひそそもそも
をろびやまと
どろそめもと
ろ鵰ろ星山のま
本草そんぞ
ふまて方そ

鵰様鷹のこと



龍腦丸

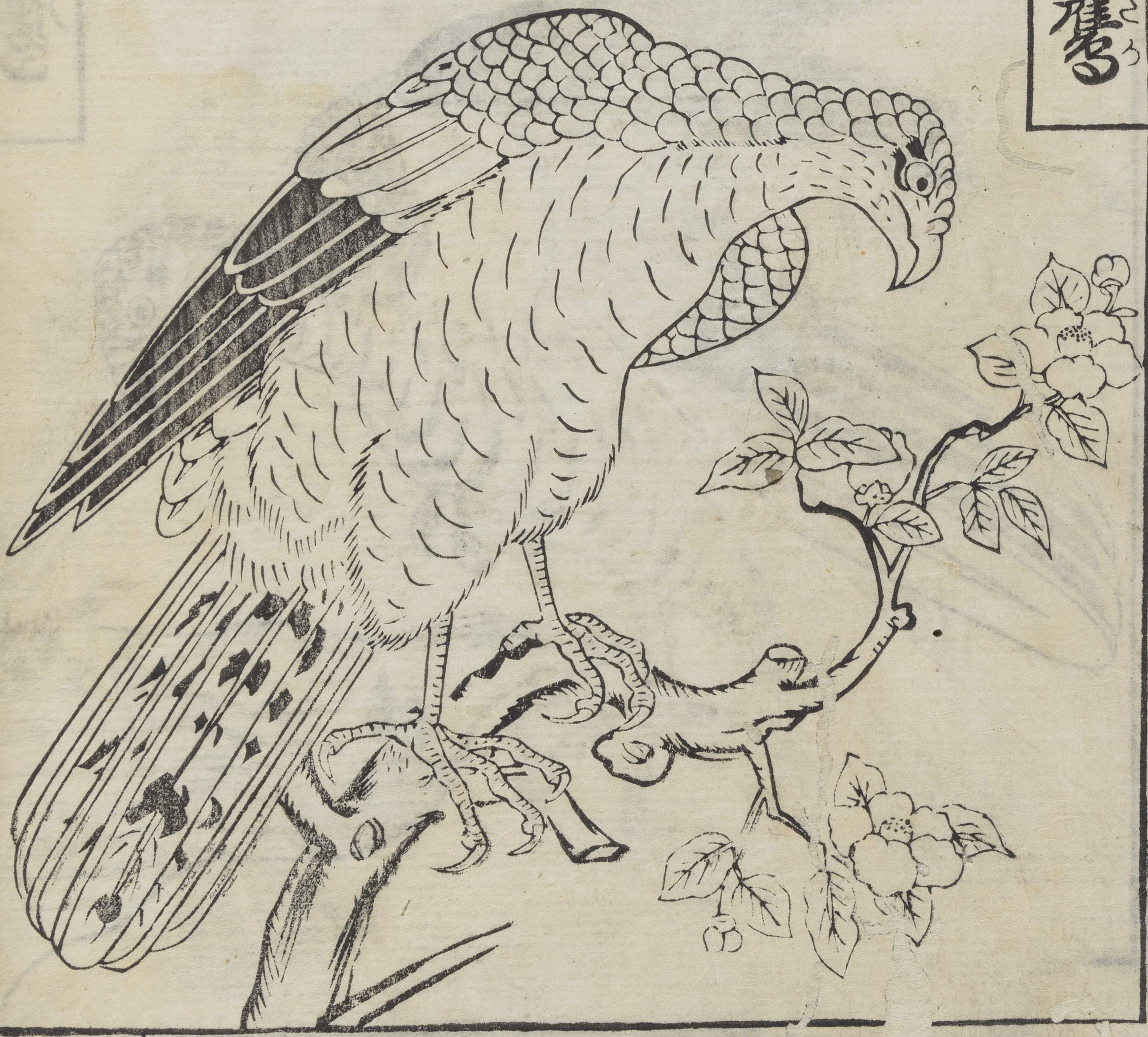
龍腦 半分　大黃 五分
人參 三分

右三味龍腦を別に細末し
合て細末し後
腦と入くまぜ合
めく蜜小豆ほど
に丸し一合酒
にて毎服二十
丸ほど
つ用ゐべし

當歸飲

當歸 一分　大黃 三分
右二味を煎じ

目白鷽



みくやんごうこう
うらゆべし
皂角散
皂角 五分
右こまかにこなし
おのおのよせんじ用ゆべし
こう入くはし
黄連散
黄連 大黄
蒲黄 黄柏
人參 各一匁
右こまかにこなし
をのおのよせんじ用ゆべし
やしなひ用ゆべし
朱砂散
朱砂 雄黄 各一分
麝香 半分
三稜 三分

鳩顳鷺



山菊葉　千金子　各一
大戟　蒲黄　分半
右㕮咀未
とい三葉を
其足重便
ぜそうり生
そうり菜
豆ろ汰
服三九
五九づゝ
水銀散
水銀半分
麝香各一
分
右ふりかけ
出おおむね
くけそ
鷲の食
おひそ

眉間鷹



ひい尿やぞりのる
鼻ハうえ孔熱し
ちく吹き気とくろく
ゐ泳しろうそく
毛そそろよろざ泡
る病疫し龍猛丸黄
連丸しえ匁めべし
一驚も一息とそ
とろめくるぬさ
るんざうよ水
と角へ文紅
もし朱砂
んべ皂角散と代
ちゆ色
驚り物よ
見そまるすばべ
當飯散と角ゆ
驚り喘急

鶻顔鷹

ぶさう噛わり尖
まと肉よりそぐ
ごーと黄箱實
ちらぐ九肉よつ
ももまみて
ろろを針し
と三七灶
一鷲の御跡
肉よりいれ
を針して針
へ王所根
しまばいゆ
一鷲のそいて
ぞんい山坂つ津
の男子乳
て月よいろ
又能脇乳

鷲顔鷹



同よりくさ
雉肉もも
一羹如の
同いもも
攙ふ乃細末
なりて自
いもくく
一隻外拠
色白青
もそん
そくよ
鷹鵰鷲
よ輕粉
味と細末
ちもも
をもび
て童便

入見鷹



つぐといゝ。鷹(こゞ)肉(にく)一鷹(こゞ)ぶつ切(ぎ)りにし、松露(まつたけ)牛蒡(ごぼう)茸(たけ)松露(まつたけ)牛蒡(ごぼう)茸(たけ)ともに細(こま)かに切(きり)、鷹(こゞ)肉(にく)よりは多(おほ)く入(いれ)、醤油(しやうゆ)酒(さけ)にて煮(に)、鷹(こゞ)肉(にく)一鷹(こゞ)ぶつ切(ぎ)りにし、醤油(しやうゆ)酒(さけ)にて煮(に



掻兒鷹

め祢ぶそんみいそ
乃国をそぐぬほ
うひろ祢ぐやよ
して忠そうと
(玉)諸國乃鷲ち
そま鷹い三毛こ
不呂るみくよ
てゐ祢そう名
ぬう天竺みく
場ちい人魔ま行
て い事名こい
冊国そい魔
い而海国
ひ新羅国よ
ていゐ高麗
ゐて儼雄と
雲具すそい郡
いふそ狐よ
り

側見鷹





下着ハ着物ニ襦袢ニ
七 着物ハ縮緬ノ
錦ノ着物
袖無ノ着物
絽ノ着物
紬ノ着物
小袖ノ着物
縮緬ノ着物
紋羽二重ノ着物
乱ノ着物
六 女ハ晴着ニ
足袋
草履
帯



鷹匠

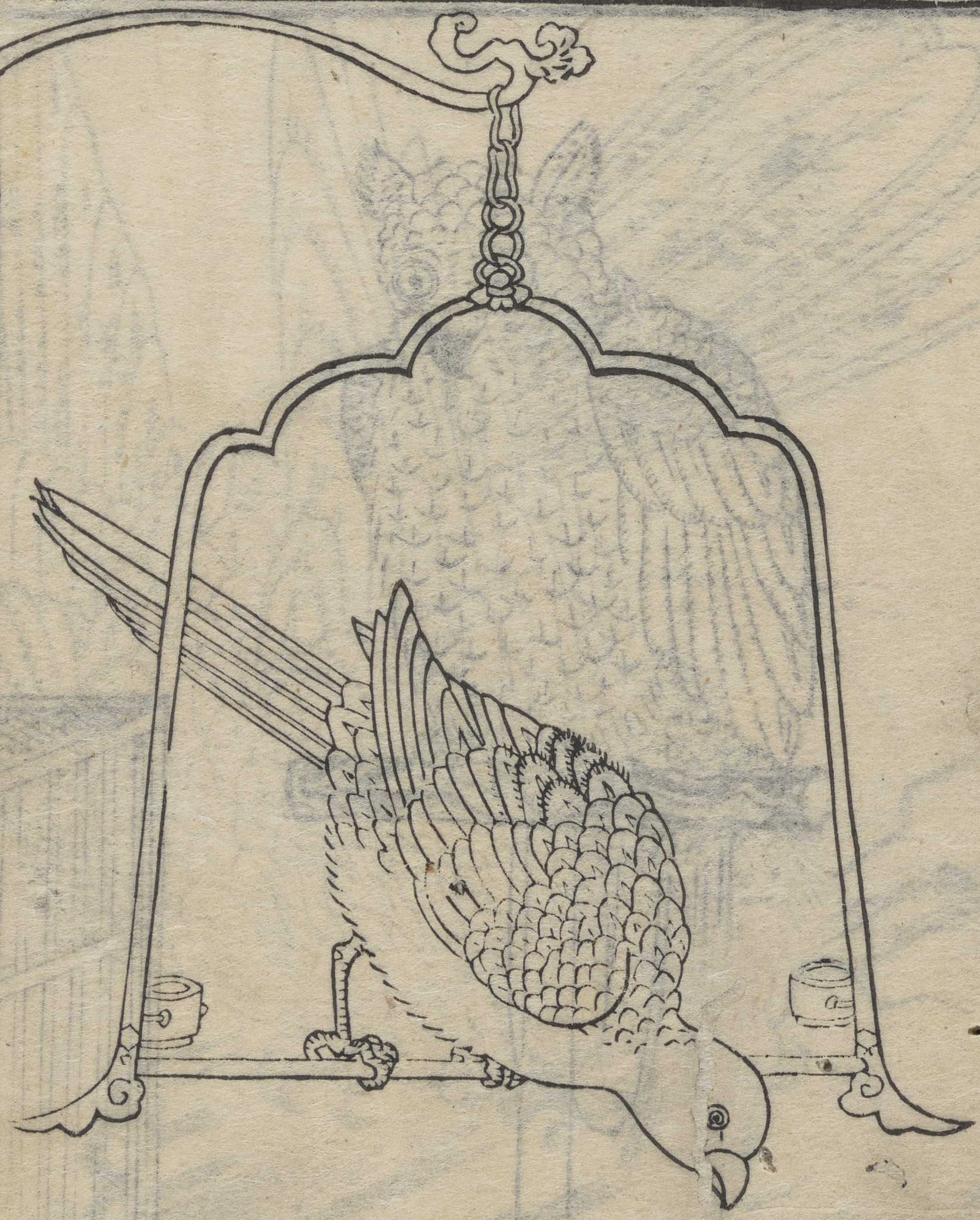
入攣手縄を解く
放鷹紙
手肋
雄子
雌同
格跨
緒
緒
緒

鵰 鷹

鳶 鷹

亂雨 離る 亜経 帚筒 餌飼 小水車 虎子 浸す 餌 温血 同 接雀 巣 囀 籔 同 呼音 多媒 餌飼 四四餌 飼 三日 孔飼 砕 取 狐 三 拗 放 試 先 放 捕 放 足 羽 振 翼 翔 鞦 同 百合 同 合 一合 水合 合 敷 振舞 乞 餌 鳴 鵄 鳴 格羽 羽 籠羽

鶚 鷲 鷹 鳶 鵰 鵟 鵄 鵂 鶹 鵩 鵋 鵑 鵙 鵲 鵯 鵐 鵇 鶫 鶇 鶲 鶺 鶸 鶯 鶉 鶏 鶴 鶩 鴨 鴛鴦 鴻 鴈 鴫 鴎 鴉 鵜 鵠 鵞 鵝 鵆 鵐 鵇 鶫 鶇 鶲 鶺 鶸 鶯 鶉 鶏 鶴 鶩 鴨 鴛鴦 鴻 鴈 鴫 鴎 鴉 鵜 鵠 鵞 鵝 鵆



切雲冬木岩根踏水伏兎
窠節指爲笋小竿月壁麟
初狩曉狩夕狩鶺鴒鶺鴒
草袖細韋鞋狩裁作賀縫
猟狩裾猟下狩狩衣除衣
損指一索打索生音出遣
鷽常披

十九

糸魚青裂玉爪負崔
玉立題肩錦帽子富狩猟
青冥金距鈎翔低徊擊征
遠気晨風胡目劃紐逆雲
六朝鶺鴒星眸制電金眸
青翅重瞬海東青凌雲君
貪鑑猟鷹雄姿

廿

絮飢修髭白霊耳鳥龍
匂黒名鞨韃鈴蹄

廿一

窮と丸時節年に縄

ちゃいろをおびたる白色をおびて分厚八十七月上旬をだ紀州分厚八十月横五十月にして黄色の糞を拵ふるやう〳〵綱乃ごとし

(十三) 上古の名鷹

天智天皇乃磐手の野守森一條院の鷂屋赤目

(十三) 奥羽鷹の巣乃名

山村巣　油田巣

富沢巣　大瓜巣

(十四) 鷹乃故事

醍醐天皇の白光鷹

後一條院乃蒼花鞦轡

黒川巣　上黒川巣

矢俣巣

たちまち大おろち一ぴき化よおちきたりて
給ふべく歯(くらべ)をひらきてたちまちに
たひらげんとするありさまの物(もの)すごき
事(こと)いはんかたなし翅(つばさ)の大鳥(おおとり)
ありて雛(ひな)をとりくらはんとするに
つゐにそのおろちを叩(たた)きころしてこれ
をくらひつくすとおもひしかばおろち
おそれてにげ遁(のが)るるをくひ殺(ころ)さんと
するとき鳥(とり)よく翔(かけ)りて
天竺(てんじく)にゆき軽舟(かるふね)にのりて